

| 令和7年度八尾市産業振興会議 第2回本体会議 議事録 | |
|----------------------------|---|
| 日 時 | 令和7年11月17日（月） 15時～17時 |
| 場 所 | 八尾商工会議所会館 3階 セミナールーム・多目的室 |
| 出席者 | <p>出席者</p> <p>山縣座長、木下副座長、岡田千津代委員、樋本委員、吉田委員、小林委員、岡田賢晃委員、今岡委員、中谷委員、山田委員、美馬委員、三宅委員、松井委員</p> <p>事務局</p> <p>岩井部長、浅井次長、後藤課長、亀村参事、米田参事、山田課長補佐、椋本、運営支援事業者 永阪氏、長澤氏</p> |

—事務局による司会で次第に沿って進行—

開会前に美馬委員より第15回ジュニエコサミットin八尾記念式典の案内

1. 開 会

事務局より、杉山委員、乾委員、北本委員、佐原委員、寺西委員、佐藤委員の欠席を報告。併せて、全委員19名のうち13名の委員の出席となっており、八尾市産業振興会議規則第3条に規定する過半数の委員の出席により、本日の会議が成立していることを報告。

—魅力創造部長あいさつ—

2. 議 事

(山縣座長による議事進行)

(1) チェックイン

グラフィックファシリテーターの永阪氏より、チェックインの方法について説明。

(2) スケジュールについて

事務局より資料に沿って説明。

(3) 提言書について・ワーク

山縣座長より、本日のワークは12月に市長へ提出する提言書を具体化させるためのものであり、二部構成で進められ、前半では提言書の第2章から第4章について、概要説明及び「八尾にとって大事なこと」や「八尾らしさ」に関するワーク、二部では提言書の第5章の概要説明及び「開く」「資源を引きつける」「共創する」という3つの柱を軸にアイデア出しのワークを行い、具体的な提言内容を深めるという全体構成が示された。

山縣座長及び事務局より提言書案の第2章から第4章について概要を説明。

・ワーク① 「八尾にとって大事なこと」や「八尾らしさ」

委員： 子どもが主役の学校づくりをめざし、昨年度から仕掛けを準備し、今年4月から「自分たちで楽しい学校をつくる」という方針で動き始めた。今では生徒が昼休みイベントを自主企画し、リーダー30名ほどが主体的に運営している。目的の共有と「まずやってみよう」という雰囲気が新しい発想や共創を生み、楽しさだけでなく成長につながる実践になっている。今後は、この経験を学校生活や将来につなぐことが課題で、生徒自身もその必要性を認識しているため、そこと一緒に考えていきたい。

委員： 新入社員研修でも、場を用意しても人が関わらなければ意味がないことを痛感している。時間と労力をかけても交流が生まれない例が多く、「関わりを生む仕掛け」の重要性を強く感じている。

委員： 人口減少は避けられないが、市全体の経済力をどう維持・伸ばすかが重要。これまで産業といえば企業が対象になっていたが、企業以外にも学校など多様な主体が関わることで新たな経済効果が生まれるかもしれない。加えて、働きやすさや暮らしやすさが向上すれば結果的に生産性にもつながるかもしれない。

委員： 地域全体で見ると、昔に比べて、人と人が“お互いに关心を持つ”場面が減っているように思う。关心がないところには、やっぱり人は集まらない。だから『关心を持ち合える関係』をどうやってつくるかが大事になる。

委員： 昔は町内会の運動会とか、自然に集まる場がいっぱいあった。今はそういうのが減っていて、放っておいても人がつながることが起きにくい。だからこそ、意識的に“場”をつくるないと感じる。

委員： 企業同士も同様で、社長同士はつながってきたが、社員同士・若い人同士がつながる場はまだ少ない。『FactorISM』とか『まちがパビリオン』みたいなイベントは、そのきっかけになっていると思うので、あのような“巻き込まれ型”的な仕掛けはすごく価値があると感じる。

- 委員： 子どもたちも、今は小学生・中学生の段階で企業と接点があるが、高校生・大学生になったときに、もっとリアルな“仕事している大人”と触れ合える場があると良い。『どんな仕事があるのか』『どんな大人が働いているのか』を、もっと早い段階から知れると、地元で働くイメージがしやすくなると思う。
- 委員： 子どもだけじゃなくて、いわゆる“子どもと呼ばれる年齢層”を広く捉える必要があると思っている。子育て政策の文脈でも、最近は30代くらいまで含めて『子ども・若者』として支えていこうという議論がある。その世代の“居場所”も、学校の中だけで完結させるのではなく、地域側にもっと受け皿が必要。
- 委員： 学校と企業の連携はもっと強化できるはず。小中学校とのつながりは増えてきたが、高校や大学とのつながりが弱い。子どもたちがもっとリアルな社会や仕事に触れる機会が増えれば、地元で就職するという選択肢も自然に生まれてくる。また、子どもたちと年齢の近い若手社員が会社や仕事を話すことで、自分の会社の良さに気づくきっかけにもなる。
- 委員： 八尾市は良い取り組みはたくさんあるが、情報発信がもったいない。市政だけでなく、市民が知りたい情報をタイムリーに、分かりやすく届けられるプラットフォームが必要。
- 委員： みせるばやおは企業の場所というイメージが強い。若者の居場所として有効に活用できないか。

木下副座長より提言書案の第5章について概要を説明。

・ワーク② 「開く」「資源を引きつける」「共創する」

・八尾市のビジョン

委員： ビジョンが必要。八尾市として「どこをめざすのか」という展望を、市民と共有しておかないと、いくらイベントや事業を積み上げても、バラバラになってしまう。

委員： 「企業版・市民憲章」のようなものがあると良い。

委員： 市民憲章を見直し、企業や学校も含めた「八尾全体の行動理念」を作り、「こういう大人でありたい」「こういうまちでありたい」というビジョンを共有することで、各主体の取組に一貫性が生まれるのではないか。

委員： 中小企業は経営力や資金を持つため、街づくりの主役として地域投資に関わることが最も効果的だが、特に製造業は内向きで地域が見えにくい傾向があるため、どう開いていくかが課題。

・子ども・若者の居場所づくり

委員： 学校の中だけでは抱えきれない部分も増えている。平日・放課後・休日でも、「ここに来たら、とりあえずいても良い、誰か大人がいてくれる」という場所が、地域にもっと必要と感じる。

委員： まさに居場所づくり。勉強しなくても良い、ただ居て良い、たまに大人としゃべっても良い。そのような場を、行政と民間とで一緒に増やしていくと、学校でカバーできない層にも届くと思う。

委員： 空き店舗や空きビル、空き工場が市内にあるので、そういうところの一角を「若者の居場所」「チャレンジスペース」として貸し出すのも良いと思う。例えば、家賃を少し下げて、代わりに地域の子ども向けイベントをやってもらうとか。

・八尾に住んで働くことを後押しする制度

委員： 以前委員より提案のあった、八尾の企業で働いて、八尾に住んだら家賃補助が出る制度を考えても良いと思う。

委員： 関係人口を増やすという意味でも、八尾に住むこと、八尾で働くことをセットで応援するメッセージは有効だと思う。子ども真ん中社会と掲げているので、「子育てるなら八尾」、「子ども・若者の成長を支えるまち」というブランドに、住宅・雇用の支援も絡めると、説得力が出る。

・つながりを作る仕組み

委員： 八尾は観光地があるわけでもないし、これっていう“わかりやすいハードの目玉”は正直そんなにない。もしあったら、すでに人が押し寄せている。だからこそ、ソフト面で『ここで働くとおもしろい』『人のつながりが濃い』っていう状態を目指したい。

委員： 例えば、企業運動会、映画鑑賞会、ゲーム大会のような企業同士・社員同士と一緒に楽しめるイベントを、市が少しバックアップしながら続けていく。そこで恋愛が生まれて結婚して、子どもが生まれるという循環が起こると思う。

委員： 実際、地元に住んでいる社員は、会社に残ってくれる確率が高い。通勤に1時間かかる人より、近くに住んでいる人の方が長く続きやすい。地元で働いて、地元で恋愛して、地元で子どもを育てるという流れを応援する仕組みがあると良い。

委員： 人口減少は避けられないが、市の経済力を維持・向上させるためには、学校環境改善プロジェクトのように多様な主体が関わり、子どもの創造性を育てる取

組こそ将来の経済投資になる。一見小さな取組も、利用者や地域にとっての価値を丁寧に言語化し、単なるCSRではなく「地域への投資」として整理することが重要。地域貢献を「関係性という資産」への投資と捉えれば、企業にも理解されやすく、継続的な地域参加につながる。

委員： 地域向けイベントを10年以上続け、当初は参加者が少なかったが、継続によって待機待ちが出るほど定着し、会社にもプラスとなった。目先の利益ではなく「来た人に喜んでもらう」という原点を貫いたことが成果につながった。

委員： 現場感覚で言うと、行政がかなり縦割りになっている。子どものことを相談しようとしても、これは教育委員会、これは子ども、これは産業、これは福祉と、それぞれ別々に相談しなければならない。誰に言えば良いのか分からぬという声はすごく多い。

委員： ホテルのコンシェルジュのようなイメージで、「ここに聞いたら、とりあえず適切な部署や人につないでくれる」という窓口が一つあるだけでも、市民にとっては全然違うと思う。子育てでは、「ほっぷ」のような拠点はあるが、まだまだ存在や機能が知られていない部分もあるので、「子ども・若者・企業・学校なんでも相談コンシェルジュ」のようなものを強化してほしい。

・地域として起業・チャレンジを支える

委員： プロスポーツの世界だと、地域からプロが出て、その下にジュニアやユースの組織がある。企業も似たような仕組みがあつて良い。「八尾代表の起業家」「八尾ユース世代のチャレンジャー」のような人を、企業のOBや会長が応援する場があると面白い。

委員： みせるばやおの一角で、「毎週○曜日の午後は地域の社長OBがここに座っているので、起業したい高校生・大学生・若手社会人は話しにおいて」といった、「ゆるいけど本物に会える場」があると、子どもたちからするとすごく刺激になる。

(4) その他連絡事項について

事務局より資料に沿って説明。

各委員は提言書の末尾に掲載するメッセージの寄稿を依頼。

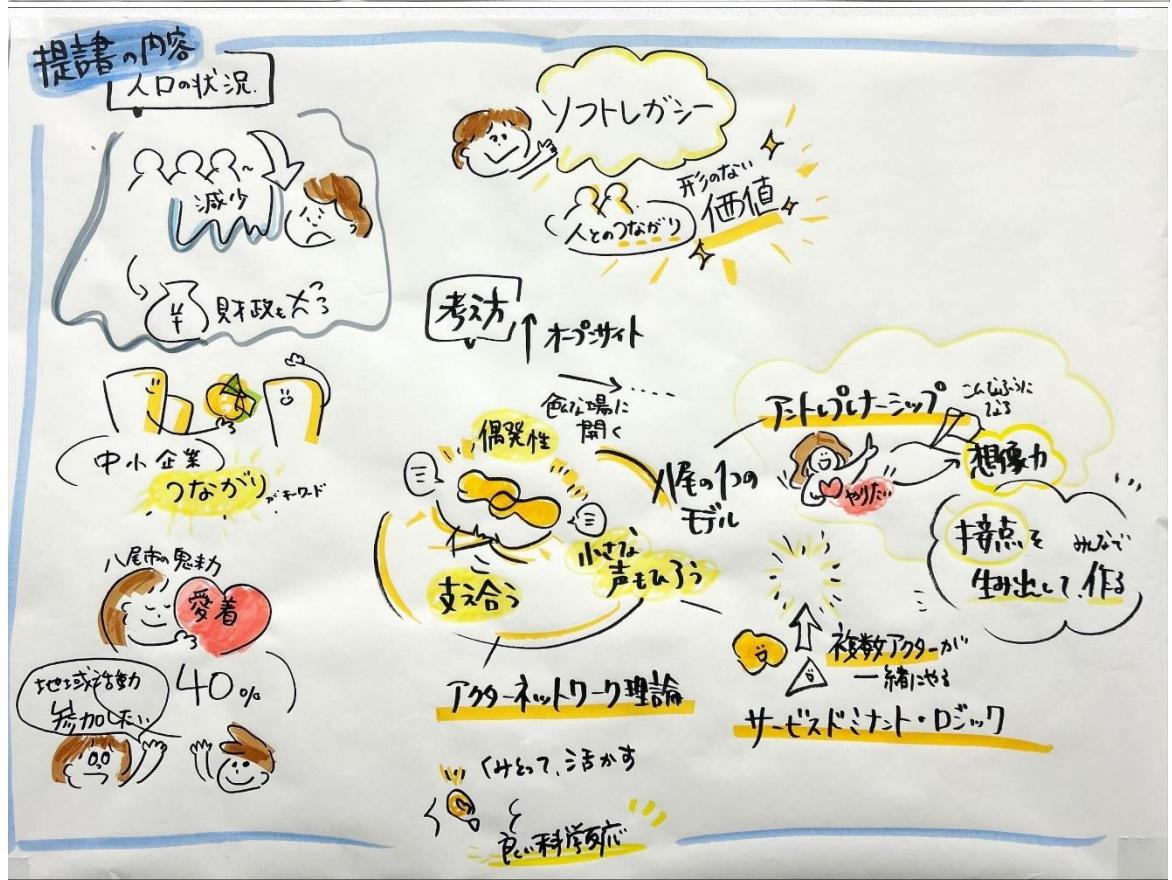
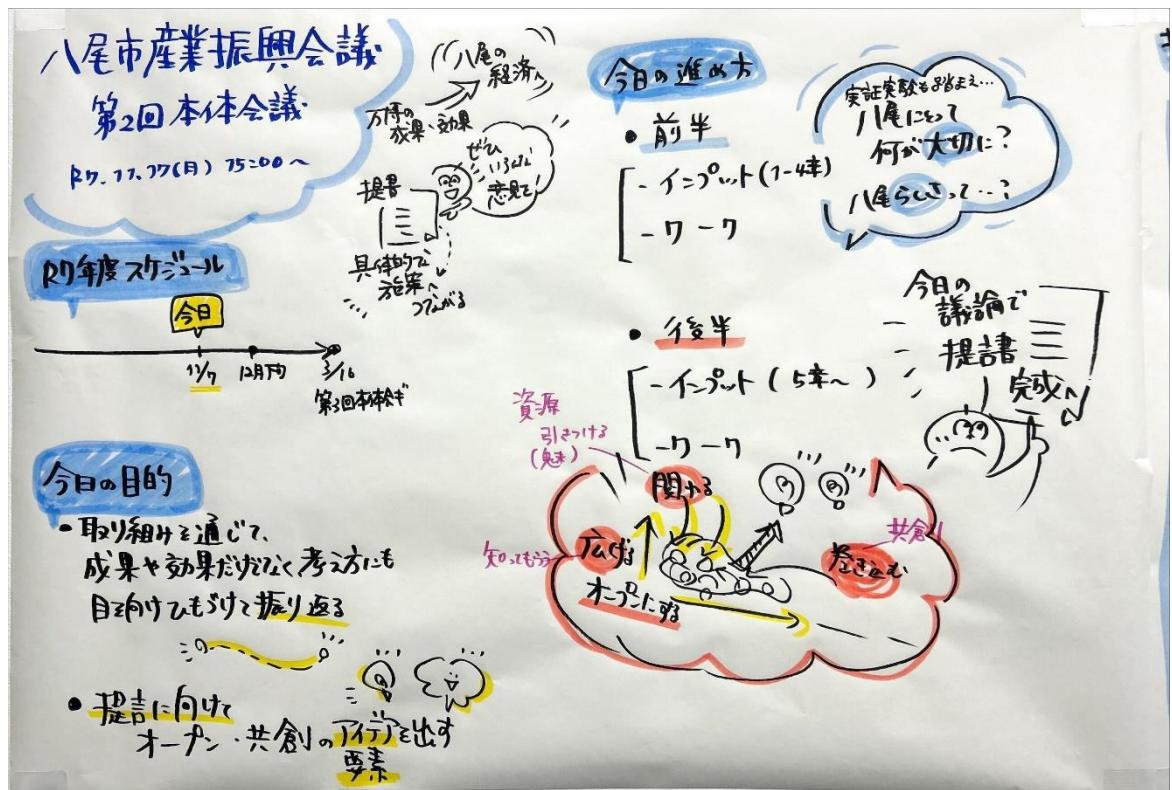
令和7年12月23日に山縣座長および木下副座長より市長へ提言書を提出する。

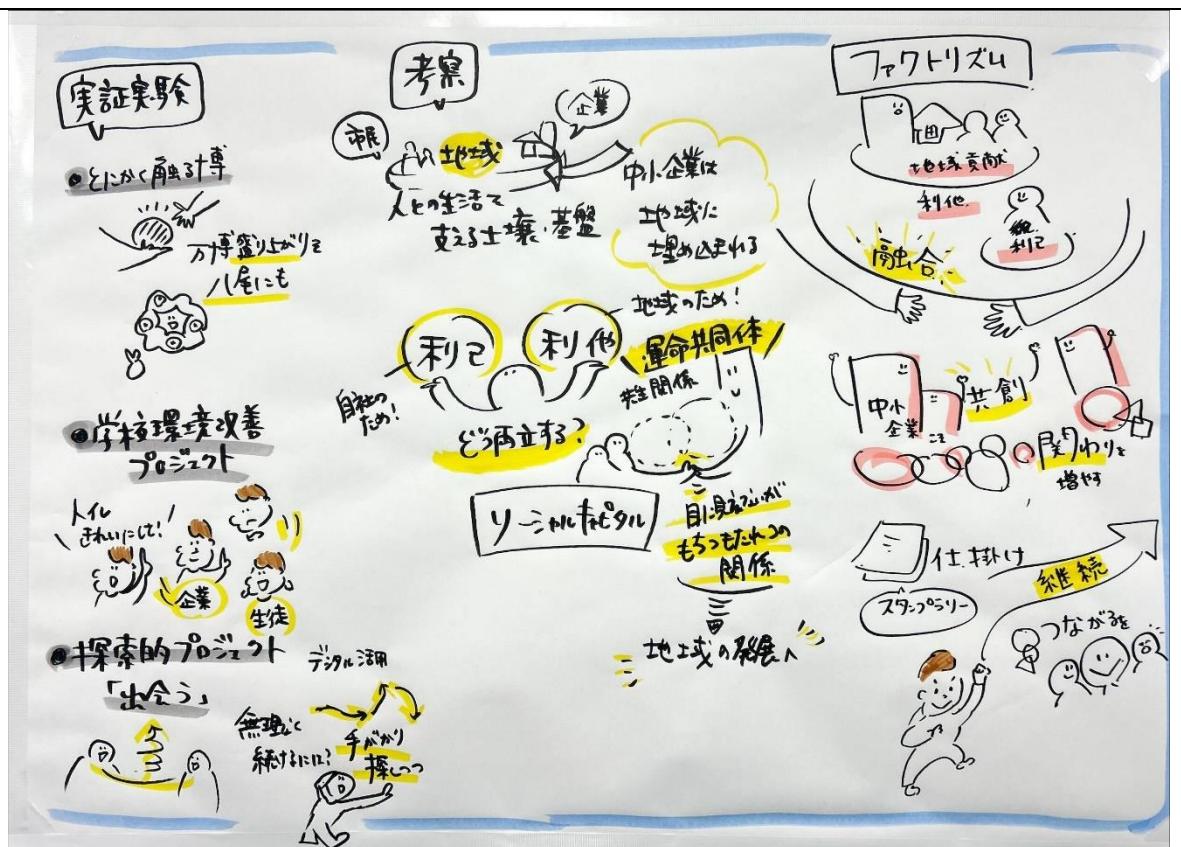
次回の産業振興会議は「本体会議」となり、令和8年2月9日に開催予定。

3. 閉会

以上

<参考：当日のグラフィックレコーディング>





<参考：当日のワーク>



